

氏 名 平 井 雅 子
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学 位 記 番 号 論 文 博 第 371 号
 学位授与の日付 平 成 11 年 9 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 THE SISTERS: The Theme in the Novels of G. Eliot, E. M. Forster and D. H. Lawrence
 (姉妹のテーマ: G. エリオット, E. M. フォースター, D. H. ロレンスの小説)

論文調査委員 (主 査) 助教授 佐々木 徹 教 授 豊田昌倫 教 授 宮内 弘

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、19世紀20世紀英国小説を代表する一見、異質な作家 George Eliot, Forster, Lawrence の代表作に注目し、それらが一つのテーマを共有し、それを核とする言語の多様な関りの中で形成されたという視点から比較、分析を行う。端的に言えば、二人の姉妹の異なる愛と生き方とその運命をたどる、というテーマだが、それは単純に見えて何層もの暗示的意味と劇的可能性を秘める。言語、文化、歴史、意識と無意識、性の捉え方に関する包括的テーマの議論を、まず、二つの論点に整理する。

第一に、これらの小説は個人と私的人間関係を中心に描きつつ、その社会との関りを追究し、現代人と現代社会の危機的状況を、巨大な鏡のごとく映し出す。これは作中すべての重要な人間関係について言えるが、本論は、特に姉妹に関する描写、議論、彼女らの意識と無意識の変化を鋭くかつ独特な曖昧さをもって描くその「言葉」に注目する。すると、これらの小説が姉妹の言動、愛、結婚にまつわる議論を中心に様々なイメージ、語句を共有し、その反復、対照、変化によって、表面上明らかな論理とは異なる暗示的言語の文脈を形づくることが判る。暗示的言語の文脈は一方では社会常識の論理と対立し、他方では個人の主張という論理と拮抗しながら、それらとは異質な論理をもち、物語の一貫性を追求するプロットに対し絶えず破壊的な潜在的プロットを展開する。一方に社会常識の理論をたて、他方に個人の主張をたてるという「姉妹」の役割構成と議論とは、その底に両者の共有する血、肉体、女性的「性」の論理を秘めており、それは、現代文明が個人とその愛の意味に愛して突きつける「死・虚無」という絶対的否定状況に姉妹が直面するなかで、セクシュアリティ（性—すなわち生命の営みもしくは関りとしての肉体—の否定によって明確になる性の衝動、自覚、自己を動かす力としての性の意識）としての姿を顕わす。それは同時に、社会の価値観とそれまでの自己に対する訣別、破壊的言動となって表れ、姉妹と関係をもつ男達にときに致命的動揺を与え、作品全体に、その世界を構成するかにみえる論理を破壊し、再構成するよう迫っている。姉妹をめぐるイメージ、役割、議論、その構成と展開は、作品全体に波乃効果をもつ一つの強力な言語体系（本論は、それを「姉妹の言葉」と呼ぶ）を形成し、小説の暗示的言語の展開を象徴的に担う。これに関連して、三つの小説は対照的断続的場面構成、小説の始まり方（形は異なるが姉妹の議論に始まる）からオープンエンディングまで多くの共通点をもつ。各小説が他の作品に新しい解釈を加え、そこに潜む潜在的テキストを開いて見せる「読み替え」となる。

第二に、これらの Sophocles の *Antigone* の末裔といってもよいほど、そのギリシャ悲劇と深い関りをもつ。George Steiner が概括的に *Antigone* 神話とヨーロッパ、イギリスの関りを論じた書を除いて、*Antigone* とイギリス小説の関りを論じた研究は、ほとんどない。しかし、「姉妹」のテーマから *Antigone* を読むと、三つの小説との顕著な共通点が明らかになる。登場人物の言動、内面を暗示する視覚的イメージ、悲劇的運命観、社会の掟と個人の信念・理想の対立、呪われた性の意識。これら共通の言葉と、その底を流れる意識とは、社会的歴史的運命観と、それに抗う個人という二つの軸を中心に回り、個人の挑戦から挫折へ、死との直面から肉体的性的本能の自覚へという、劇的展開を誘発する。それは単なる心理的ドラマではなく、人間関係の劇的展開が人物の意識と無意識の壁を突き破り、論理的予想を裏切る言動（一種の「狂気」）を

生み、その衝撃が周りの世界の価値観を揺さぶる。

その暗示的言語の文脈は、まず、社会に従うか、個人の信条と情熱に従うかという個人の内的葛藤の文脈と重なる。同時に、姉妹の議論における率直な意見と心情の開陳（信頼）から対立、反動、分裂のプロセスは、姉妹それぞれの意識の底に押し込められた精神と肉体の葛藤・分裂を、理性（センス）と情熱（パッション）のジレンマを否応無しに引きずり出す。それは遅かれ早かれ、姉妹が男達との関係と幻滅を通して人生の不毛、死を意識する中で、「呪われた性」すなわち、既に自分ではどうにもならぬ力で引き裂かれた精神と肉体の意識に発展する。この不条理の力はギリシャ悲劇的な「運命」のイメージによって語られるとともに、個人が担う社会と祖先の歴史、あるいは体を流れる「血」と「文明」の共に逆らい難い「流れ」として扱われる。そこで姉妹の苦痛、アイロニーの感覚にともなう、これらの作品に共通の曖昧な「自然」、「花」、「女性」のイメージが登場し、「死」、「墓」、「氷」、「鏡」のイメージと交じり合う。Eliotに見られる「宝石」、「彫像」からLawrenceの用いる強烈で多彩な「色」、「身振り」までを一連のイメージとすれば、それらはそもそも自然の花であり女性であり、死を意識する瞬時の空間に凝縮された「官能」の姿であると判明する。そこに様々な形でセクシュアリティとフラストレーションが暗示され、イメージの文脈は、それを一連の本能的衝動、肉体に潜む生命力の「流れ」として浮かびあがらせる。

第3章で提示する *Antigone* の「読み」は、三つの小説との比較が明らかにする「姉妹」のテーマ、その秘められた意味の解釈である。George Steiner は、フランス・ロマン派や Matthew Arnold による *Antigone* 解釈が、ヒロインの宗教的情熱にのみ注目し、個人の意志と社会の法に引き裂かれる個人の悲劇を見落としたことを批判し、それが妹 Ismene の無視と、この劇の軽視を招いたと考えた。プロット上、劇の中心に描かれるのは、敵国に味方した死者（*Antigone* の兄の Polynices）の埋葬を禁ずる叔父 Creon と命に反して肉親の埋葬を願う *Antigone* との対立である。それを、社会の掟か自己の意志かの選択を迫られ、その結果を引き受ける個人のジレンマとして把える視点こそ、イギリス小説がギリシャ悲劇を自らの中に取り入れた際の視点である。それは冒頭の *Antigone* と Ismene の議論に重なる視点であり、三つの小説すべてが姉妹の議論を冒頭部に置くという偶然とは思えぬ一致が、その重要性を裏付ける。

さらに *Antigone* と三つの小説に共通するのは、姉妹の議論が作品の冒頭以後も形を変えて展開され、その意味を具体化しつつ追求することである。妹（女の常識）と対立した *Antigone* を単独決行に走らせ、その Ismene に、理性を棄て自分も加担したと叫ばせる「血」。生きて墓に投げ込まれ、祖先の骸の冷たさ（死の現実）に直面する *Antigone* は、蓄のまま朽ちる身の性の叫びにめざめ、呪われた両親の夜の床を思い描く。姉妹の言動は Creon の怒りを煽り、彼はそれを「狂気」と叫び、背後にある共通の「血」の声と予言を無視する。社会の声（コーラス）は動揺し、権力が彼らの存在を脅かす新たな「狂気」になった事を予感する。姉妹の議論は、周囲の人間関係を巻きこみ回転させる渦のような動きの中心にあって、それを予見させる指標となる。

本論第2章は、三つの小説を結びつける伝記的根拠を挙げる。G. Eliot, Forster, Lawrence という個性的な作家を結び付ける発想は、従来あまり見られなかった。しかし、例えば若き Lawrence は小説を書き始めるに当たり、Eliot の小説のパターン（二組の男女の対照的な愛の展開）にならうと語り、Forster と Lawrence は 1914 年から十年間もお互いの作品と批評を送り交わす、という具合に彼らには強烈な出会いがあった。作品を通して。片親に偏る愛、教育と疎外、反社会的恋愛など共通の体験を通して。19 世紀半ばから 20 世紀、有機的自然の崩壊と父親の権威の喪失を意識した作家達は、互いの作品に共通の問題意識を発見し、その原型をギリシャ悲劇に見出した。第3章前半は、三人の作家の *Antigone* への言及、批判を挙げて分析する。

Eliot と他の二作家の執筆には、約 50 年という受容にも批判にも格好の距離がある。Victoria 朝の倫理的抑圧下での性描写や個人の自由の表現は、第一次世界大戦前後に書かれた Forster, Lawrence の作品と、言語上、また暗示のレベルでどう比較されるか。いずれが *Antigone* に近いのか。それは歴史的順序とは必ずしも一致しない。

第4章で論ずる *Middlemarch* の歴史観は、*Antigone* と *Women in Love* の中間に位置する。偉大な知性に憧れ、不毛で利己的な学者 Casaubon と Dorothea。その献身的情熱に機会を与えるのを拒む社会。*Antigone* や聖女達の偉大な行為が可能であった時代との比較により、Dorothea の善意はパロディ化され、同時にアイロニックな感傷と共感を呼ぶ。しかし、小説に真に現代的開放性を与えるのは、(1) Dorothea の見逃す現実を痛烈に把える Celia のリアリズム、(2) 信愛する Ladislav に裏切られたと思ひこむ Dorothea に、引き裂かれる肉体の苦痛として目覚めるセクシュアリティ（それが後に彼女に、

自我の壁を破り愛を告白する力を与える), (3) 宝石, 質素な服, 彫像, 墓, 牢獄, 冬と春, 水, 光, 鏡, 頬の色などのイメージを介して暗示される肉体と精神の生と死のドラマ (一方が他方を閉じ込め, あるいは開放する), そこに生ずるセクシュアリティの非論理的展開と意識化である。

第5章。*Howards End* では, 姉妹の議論は最も知的で親密な相互理解の段階に達する。反面, それは姉妹の対話の閉鎖性, 他者に対する恐怖という知識人特有の屈折を映し, 小説全体が一度, 築きかけた方針を自ら取り崩すという自己否定的文章のリズムを特徴とする。しかし, 単に Forster のリアリズムと解されることの多い冒頭でも, Helen から姉への数通の手紙を分析すれば, その心に浮かぶまを綴り, すぐに言を翻すといった調子と, 意表を突く現実展開, それに引き回される読み手 Margaret (しかも, 手紙には彼女の言葉も引用される) の構成が, 見事に考え抜かれたフォームであることが Antigone-Dorothea 対 Ismene-Celia の関係は逆転し, 物質主義者 Wilcox 氏と結婚する Margaret の「常識」を中心に, Wilcox 達への反発から社会の弱者 Bast を救おうとする Helen の精神主義との対立が描かれ, 二転三転 (Bast に身を許し失踪する Helen, 捕獲の罠, 妊娠発覚, 姉夫婦の破綻, Bast の死と Wilcox の長男の逮捕), 何が狂気かを問わせる事態を招く。しかし, 人々の挫折の後に力をもつのは, 重い喪失感をくぐった Margaret のセクシュアリティではない。都市文明の潮流の中で, 死者の声に耳を澄ます Margaret を通して示される田園のヴィジョン, 家と樹木, その神秘的リズムである。それは姉妹の言葉と肉体を相対化する。

人類に重くのしかかり生を切り刻む現代文明, という宿命感を共有し, 姉妹の意識を中心に男達, 社会との関係を掘り下げる暗示的言語の文脈。それがセクシュアリティの言葉としての性格を最も強めるのは *Women in Love* (本論第6, 7章) である。第6章は, 多様で鮮烈な「色」, 「身振り」, 暴力や欲望, 狂気の象徴的イメージとなる「動物」, 「血」, 「投石」, それらが用いられる場面を分析する。その結果, 単にイメージの多様性や衝撃が問題なのではなく, それらをつなぎ, 対立させ, 交替させたり破壊する独特の「リズム」があることが明らかになる。「姉妹の言葉」は単に姉妹の言葉としてあるのではなく, 人物は舞台の俳優のように, 言葉という「役」を服のように着たり脱いだりする。そこに, 「服」, 「帽子」, 「ストッキング」のイメージの重要性がある。また, この着脱の自由さが同じ文脈に入り込むのを可能にするのは, 池に移る月に向かって狂ったように石を投げる Birkin や, 通過する汽車に向かって進み, 怖がる雌馬に鞭をあて血を流させる Gerald などの男達, そのセクシュアルな暗示の強い言動であり, 彼らと姉妹の対話だと考えられる。男の言葉と女の言葉, 文化人の英語と炭坑夫達の方言が交じり合い, 例えば, 姉妹の言葉に混じるスラングの響きなどを通して垣根を越えて力を揮うのが, この小説の「姉妹の言葉」の特徴である。

Antigone と *Middlemarch* のイメージを多様に展開させ, 「姉妹の言葉」とそれに敵対する言葉 (社会を動かす論理, 産業主義と主知主義) との出会い, 崩壊, 再生と言うドラマを最も追求したのも *Women in Love* である。冒頭の姉妹は, 「結婚」という伝統的テーマで対話しながら, 全てが「蕾のまま枯れてしまう」という Antigone のイメージを再現する。それは前世紀の「若い女の結婚の話」のパロディでもあり, 思索的で正面からジレンマを追求する Ursula と, 暗示的破壊的な言葉を意識的に用いて話相手を挑発し, 主導権を握ることで虚無の恐怖を逃れようとする Gudrun との, 微妙に異なる意識間の対話でもある。以降, Ursula が Birkin と「愛」についての正面からの議論 (ディベート) とその行き詰まり, 罵倒 (知的言語の欺瞞と幻想を砕く) と本能的な和解を重ね, 言葉の対立を隠蔽することなく, それを乗り越える男女関係を樹立するのに対し, Gudrun は Gerald を相手に, あくまで暗示のレベルにとどまる言葉と身振りの刺激的, 破壊的力を試す危険な遊び (ゲーム) にのめりこむ。ディベートとゲームを軸に, 二律背反的議論と愛の闘い, 男達の言動のパロディ, 風刺, 虚無主義的 Loerke との言葉遊び (18 世紀文学のパロディと外国語の連鎖) などが繰り広げられる。二つの軸が協調し, 「対話」するとき, フィクションを通して真実を求める闘いが可能になるが, 姉妹の対話が途切れるチロルでは Gerald が死に, ゲームを支配しようとする意識から逃れられなかった Gudrun の姿が, 石に囲まれた不毛の死, Antigone の悲劇に重ねて描かれる。Birkin は, Gerald との男同士の契りが不成立に終わったことを嘆く。そこに姉妹の対話を相対化する関係への願望が見える。

対話し, 破壊し, 再生する小説のリズム。Forster は, 第五交響曲には周知のリズムの他に全体の構想のリズムがあるが, 後者を聞き取れる人間は少ないと述べ, そのようなリズムをもつ小説を切望した。Bakhtin は, 言語はその社会文化的イデオロギーと発話者の意図が闘う過程で「声」になると考え, 複数の声が言説を通し対話する「多声楽的小説」を理想の文学とした。Lawrence では, 個人の様々な潜在的欲求が, 複数人物の言葉を借りて声となり, 対話し, 変化する。権力の支配構

造に基づく Bakhtin の「対話」理論は、セクシュアリティの、言葉を破壊し再生させる力を考慮に入れていない。言葉の意味の喪失という現代の宿命と闘う三人の作家は、*Antigone* に「姉妹の言葉」を見出し、言葉の死、裂け目に現れるセクシュアリティを確認し、言葉を超える言葉のリズムを再現した。小説という形とテキスト間の対話を通して。

論文審査の結果の要旨

本論文はジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』(1872年)、E. M. フォースターの『ハワーズ・エンド』(1910年)、D. H. ロレンスの『恋する女たち』(1920年)の三つの作品を取り上げ、「姉妹」のテーマを軸にして比較分析を行ったものである。ジェイン・オースティンの作品を初め、家庭生活を描いた風俗小説の多いイギリス文学には沢山の姉妹が登場するが、その中から論者がこの三つの作品を選んだのには特別な理由が存在する。それはこれらの小説が全てソポクレス作の『アンティゴネー』と関わりがあるということである。

エリオット、フォースター、ロレンスのそれぞれが『アンティゴネー』を強い関心を持って読んだことはさまざまな証拠があり、事実として間違いない。そして、ロレンスが自分で書こうとしているような現代の小説、ことに人物の内面に焦点を当てた心理小説はエリオットに始まったものと述べていることを思い合わせると、ここでの議論がエリオットから始まるのも肯ける。フォースターもエリオットを小説家として尊敬していたし、『ハワーズ・エンド』執筆当時はロレンスと非常に親しく、お互いの作品を論評し合っていたことなどもあり、『アンティゴネー』を軸にしたこの三人の取り合わせは一見異質なものを集めたように見えるが、一つの認識しうる文学的血縁関係を形成している。

アンティゴネー神話については、ジョージ・スタイナーがその著書『アンティゴネーの変貌』(1984年)に於いて、古代ギリシャから現代に至るまでのヨーロッパ文学を広く展望した研究を発表し、その中で『ミドルマーチ』に対する短い言及を行っている。この小説の中で主人公ドロシアが何度かアンティゴネーに喩えられていることを考えると、スタイナーのものを除けば、現在までソポクレスの劇とエリオットの小説の関係を追及した論が殆ど無いのは意外と言えよう。それに、スタイナーは他のイギリス小説を殆ど扱っておらず、その空白を論者は埋めようとするのである。

『アンティゴネー』は、個人の情熱と社会の掟の葛藤を具現する叔父クレオンとアンティゴネーの対立を中心に展開すると考えるのが普通であるが、スタイナーはこの劇に於ける「姉妹の弁証法」を強調し、劇の緊張感の鍵を握るのはアンティゴネーとその妹イスメーネーの対立・対話だとする。これに示唆されて、論者はこの劇が姉妹の間に交わされる対話から始まるように、本論で取り上げる三編のイギリス小説も姉妹の対話に始まることを指摘し、そこでは「姉妹の弁証法」が物語の展開を支配していると主張する。加えて、言語表現、イメージ、場面構成の点でもソポクレスの劇と共通するものが多いと論じるのである。ただし、ここで論者の採用した方法は折衷的なものであり、それは究極的には『アンティゴネー』、『ミドルマーチ』、『ハワーズ・エンド』、『恋する女たち』の間に見られる影響関係を実証的・歴史的に探るというよりは、むしろ四つの文学テキストを共時的に眺めることでそれらの読みを深めようとするものである。以下、それぞれの小説についての論述で特に注目すべき点について略述する。

『ミドルマーチ』は十九世紀の社会状況故に、現代版聖テレサとなることの出来ないドロシアという人物を描くが、これを一種のパロディーと見るならば、理想主義的な傾向の強いドロシアに対して知性の面では劣るが現実的な意味ではより賢明な妹シリアの配置がやはりパロディー的效果を生む、と論者は指摘する。スタイナーは従来の『アンティゴネー』解釈はヒロインの宗教的情熱のみを重視し、そのために、イスメーネーという存在を無視しがちであった、と述べた。論者はその『ミドルマーチ』論でこの視点を取り入れ、従来余り論じてこられなかったヒロインの妹シリアが物語の中で果たす役割について新しい光を投げかけている。

『ハワーズ・エンド』は、「どこから始めてもよいのだが、さしあたりヘレンの手紙からでも始めようか」という語り手の無頓着なコメントと共に、ヘレンから姉マーガレットに宛てた手紙で幕を開ける。この冒頭について論者は、ヘレン自身の気まぐれな文体、あるいはマーガレット(即ち、読者)に期待を持たせてはそれを裏切るというその文面が小説全体の形式・内容を表現していると考え、一見何の計算もないようなこの導入部が、フォースターが『小説の諸相』で述べている小説の「リズム」の概念を具体化したものであることを示す。この2人は『ミドルマーチ』の姉妹とは異なり、どちらも知性的でお互いをよりよく理解しているが、彼女たちの考えをわかってくれる男性には恵まれず、その意味で、冒頭に置かれた手紙というコミュニケーションの形態が彼女たちの対話の閉鎖性を象徴するという論者の指摘には説得力がある。

『恋する女たち』の分析では論文中最も密度の濃い読みが展開されている。特に、作品に表れる「色」のイメージ、および登場人物の身振りの分析はその綿密さ、周到さに於いて同種の研究を凌ぐものである。論者が言うところの「姉妹の言説」は、ジェラルドとバーキンの男性的なセクシュアリティの言説に単に対立するのではなく、対話を交わすのだとして、テキスト内でこれらの言説が交渉を行う様を丹念に跡付けているのも注目に値する。加えて、その対話、あるいは交渉をテキストに現れる着脱可能な衣服のイメージと結合して読み取ろうとする試みは独創的なものである。

もっとも、議論の展開で気になるところがないわけではない。エリオットは確かに「アンティゴネーとその教訓」というエッセイを発表するほどソポクレスに強い関心を抱いていたが、その中では姉妹のテーマについてはなんの言及も行っていない。論者は「二組の男女を使うというエリオットの『いつものプラン』を拝借する」というロレンスの言葉を引くが、それはドロシアとカゾボン、ロザモンドとリドゲイトの二組を指したもので、そこに妹のシリアは含まれていないはずである。つまり、エリオットが『アンティゴネー』に於ける姉妹のあり方に特に注意を引かれたと断じるのは難しいし、ロレンスがエリオットの作品に姉妹のテーマを読み取ったかどうかとも疑問である。論者は、アンティゴネーに見られるセクシュアリティの自覚を強く主張し、従って取り上げた小説についてもセクシュアリティに関して述べた部分が多いのだが、これはロレンスについては概ね妥当ではあっても、例えば、『ミドルマーチ』のドロシア、『ハワーズ・エンド』のヘレンに関連して「水」、「窓」のイメージが性的な意味を付与されている、というような見解にはいささか無理があるように思われる。

フォースターは『小説の諸相』の中で交響楽の比喻を用いて小説を論じているが、それに倣えば、本論はここで取り上げた小説の間に響く音楽を聞き取ろうとした試みであった。欠点のないものではないが、全体としてとらえれば、その試みは姉妹の対話という切り口からそれぞれのテキストの豊かな読みに結実したと言えるであろう。特筆すべきは『恋する女たち』の考察で、これは十分に国際的に通用する水準に達したものである。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1999年7月13日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。